

第2回福岡市史講演会

「志賀島出土金印から見た東アジア世界」

日時／平成十八年十月一日(日)午後二時～五時

会場／福岡市博物館一階講堂

入場無料／事前申込み不要(定員先着二三〇名)



◀ 金印「漢委奴國王」(福岡市博物館所蔵)



◀ 金印印面(原寸大)

▲ 志賀島(写真・埋蔵文化財センター提供)

講演

午後二時～二時五〇分

「漢委奴國王」金印

「下賜の意味」

西南学院大学教授 高倉洋彰

講演

午後三時～三時五〇分

「漢帝国と東アジア海

「金印をめぐる」

学習院大学教授 鶴間和幸

シンポジウム

午後四時～五時

「金印から見た東アジア

「世界と奴国」

九州大学教授 宮本一夫

(司会進行役、福岡市史編集委員)

西南学院大学教授 高倉洋彰

学習院大学教授 鶴間和幸



▲ 福岡藩の学者亀井南冥が著した研究書「金印弁」に描かれた金印と志賀島(福岡市博物館所蔵)

福岡市博物館

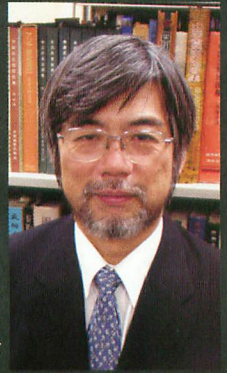
シーサイドももち・福岡タワー南
住所 福岡市早良区百道浜3丁目1-1
TEL 092-845-5011
HP <http://museum.city.fukuoka.jp/>

講師紹介



高倉 洋彰

西南学院大学教授 文学博士。一九四三年生まれ。一九七四年九州大学大学院文学研究科博士課程単位取得。日本考古学専攻。九州歴史資料館を経て現在に至る。弥生時代を中心として日本と朝鮮半島・大陸の交流史研究に取り組む。著書に『弥生時代社会の研究』『日本金属器出現期の研究』『金印国家群の時代』他がある。



鶴間 和幸

学習院大学教授 文学博士。一九五〇年生まれ。一九八〇年東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得。東洋史学専攻。中国社会科学院歴史研究所外国人研究員、茨城大学教授を経て現在に至る。秦漢時代を中心に中国古代史を現地出土資料や文献から世界的視野で追究する。著書に『中国の歴史3 ファーストエンペラーの遺産 秦漢帝国』『始皇帝陵と兵馬俑』他がある。



宮本 一夫

九州大学教授 文学博士。一九五八年生まれ。一九八四年京都大学大学院文学研究科修士課程修了。東アジア考古学専攻。東アジア新石器時代、青銅器時代の文化研究等をもとに、農耕文化開始期の日本との文化交流を多角的に検証する。著書に『中国古史第1巻 神話から歴史へ(神話時代 夏王朝)』他がある。

国宝「金印」は福岡市博物館常設展示室へ総合して展示中。



交通案内
市営地下鉄 西新駅下車(1番出口)徒歩15分
西鉄バス 博多駅交通センター(5番のりば)より約35分
天神バスセンター前(1Aのりば)より約20分
博物館北口、博物館南口または福岡タワー南口下車すぐ

福岡市博物館
シーサイドももち・福岡タワー南
住所 福岡市早良区百道浜3丁目1-1
TEL 092-845-5011
HP <http://museum.city.fukuoka.jp/>

〈福岡市史講演会について〉
福岡市史編さん室では、福岡市史編さん事業を、広く知って頂くため、今後も、福岡市史に関係する講演会やシンポジウムの開催を予定しております。講演会やシンポジウムでは、市史編さん活動の中で発見された、新たな歴史・文化の紹介から、市史編さんを支える新たな学術理論まで、題材を幅広く取り上げていく予定です。なお市史編さん事業の活動については、年2回発行の市史編さん広報誌「市史だよりFukuoka」などを中心に、市民の皆様にお伝えしていきます。

天明四(一七八四)年、福岡の志賀島で、全くの偶然から、忽然と世に現れた金印。発見当時から現代まで、その真偽のほどを初めとして、多くの謎を人々に投げかけ、多くの学者や人々がその謎に挑戦し、様々な説を唱えてきました。
そして現代、東アジア各地における同類の印章の発掘・発見、さらには成分の科学的な分析などから、この志賀島出土の金印は、今から約二〇〇〇年前の弥生時代の日本に、大陸からもたらされたものであることが、ほぼ定説となつていきます。
しかし、まだまだ残された謎は多く、しかも広大な東アジア世界のなかで、この金印のもつ意味が、更なる謎として、われわれの前に現れてきたのではないのでしょうか。
この講演会では、志賀島出土の金印をめぐる二つの講演と三人の研究者によるシンポジウムから、約二〇〇〇年前の東アジア世界の中で燦然と輝いた金印と、当時の北部九州の姿を、浮かび上げさせていきます。

漢代五銖銅貨(福岡市博物館所蔵)